

瓦職人 — 山本清一 [後編]

屋根の瓦葺きを専門とする「屋根屋」から、重要文化財にも使用される伝統的な瓦を製作する「瓦屋」も兼ねる、いわば「瓦マイスター」ともいえる存在となった山本清一^{きよかず}。現在の瓦業界を取り巻く環境、そして貴重な技術を後世に伝えるための取り組みについて語ってもらった。



工房で瓦製作を見守る山本会長。粘土の形を整えているのは、会長の孫・山本一輝氏だ。瓦造りの技は、若い世代に確実に受け継がれている。

古代瓦の技を守りたい

瓦葺きの仕事は、当然ながら屋根の上での高所作業が多い。突然の強風や地震などで危険にさらされることもある。折りしも、茨城の竜巻被害の数日後、栃木の現場から竜巻発生の可能性ありとの情報もたらされた。やっとの思いで育てた職人に何かあってからでは遅い。技を守るといふことは、技術者を守るといふことだ。「危ないと思ったら、作業中止してすぐに逃げるんやで。工程はわしが何とかするよってな」電話で指示する山本会長の口調が熱を帯びた。



姫路城鬼瓦

遠く一四二四年前の飛鳥時代に伝わって以来、瓦葺きや瓦造りは日本独自の建築技術として発展してきた。しかし現代は、品質と同様に効率や多様性も重視される時代。機械化・大量生産によって、手作りで製作されていたころの技はほとんど顧みられなくなった。瓦葺き職人の資格である「瓦葺検定一・二級」の取得者は全国で二万人強いるが、その数は減少傾向にあり、瓦以外の材料で屋根を葺く例も増えてきた。「三年かけて建てとった家が三カ月で建つご時世。大工も瓦屋も、昔ながらのやり方ではみんな商売上がったりや。由緒ある瓦屋がぎょうさん看板下ろしましたな」そんな中で当時の製法や道具などを地道に研究し、古代瓦造りを復活させたのも、貴重な技を後世のために保護したいという一念からだ。

姫路城で役立った民家の屋根葺きの技術

一方、姫路城の昭和の大改修の現場では、「瓦と屋根の間の土や漆喰の置き方に気を遣う」という民家の屋根葺きならではの経験が役に立った。

「姫路城は丸瓦の下に土を置き、外から防水性のある漆喰で固めるやり方でしたが、土が多すぎると漆喰の水分が土にしみ込んでしまう。それなのに、当時の監督の指示は『土はいっぱ



やまもと・きよかず●父、そして井上新太郎氏のもとで修行を積み、文化財建築の瓦葺き職人に。独立後、奈良県生駒市に会社を設立。さらに理想の瓦を求めて瓦製造も開始。数々の国宝・重要文化財の修復・再建に貢献し、現在は日本伝統瓦技術保存会の会長も務める。



姫路城天守閣 (現在は修復中)

「技術は、税金のかからない財産。 一人でも多くの職人に 伝えていきたい」

度も失敗して問題解決してこそ、ある時神がか
り的な知恵が湧いてくることがあるんですわ」
敷地の一角にある倉庫には、これまで工事の
たびに作成してきた大量の図面が保管されてい
る。美しい造形の瓦屋根を作り上げるには、正
確な施工図・原寸図が不可欠。図面を書くこと
の大切さも、伝えていかなければならない。
「瓦葺きも、瓦造りも、わしの技術は何も自分

で考えたり見つけたりしたもんやない。親方や
親父、さらにはその先の親方からずうっと受け
継がれてきた技や。それを伝えていくのも職人
の大事な役目やと思います。技ちゅうもんは、
いくら相続しても税金はかかりませんからな」
飽くなき技の探究、そして次代への継承……ど
うやら、山本会長の楽隠居はまだまだ先のこと
になりそうだ。

日本職人紀行



左/姫路城で使われる「鯨」の図面。最終的なできあがりの寸法を示す「原寸図」とは別に、乾燥と窯焼きによる収縮を見越して大きめに作るための「生寸図(なますんず)」も必要だ。
右/「軒丸瓦」の製作。工房では、姫路城のみならず、唐招提寺・東本願寺・正倉院、さらには韓国の寺院まで、さまざまな文化財の屋根瓦が丹念に造られている。

技術を次世代に伝えていくのも、 職人の大事なつとめ

技術保存のためには、後進の育成も重要だ。
「会社をつくったもう一つの理由は、文化財
を残していくには人を育てなあかんと思っただ
からです。どんな立派な文化財もいつかは修理が
必要になってくる。その時に、金はあるけど直
す人がおらんのでは笑い話にもならん」
かつては職人の世界でも文化財の本当の価値
が理解されず、千年以上前の瓦が残っていても
それを見習って当時と同じ葺き方を再現しよう
という発想がなかった。文化財を保護する側にも、
職人の技術への敬意に欠ける部分があった。

「わしは早くから、何か手を打たないかんと
思うてました。頭の固い人にはなかなかわかっ
てもらえんけど、素人を一人前にするには最低
十年はかかる。今のうちに教えておかん、い
ざ修理するときでは間に合わん。それでは文化
財は守れんのですわ」
山本会長は平成六(一九九四)年に文部省
(当時)から選定保存技術保持者に認定され、そ
の本瓦葺きの技術は保護の対象となっている。
しかし会長はそれでも充分ではないという。
「農業やる人を育てるのに、土地と苗だけ渡
してどうぞ、と言うてるようなもん。実際には
知識、肥料、収穫物を買ってくれる人も必要
なんや。本当に技術を残したいと思うなら、それ
を生かす仕事まで責任持って考えてくれんと」
山本瓦工業の工場には二つの研修場があり、
中には日本の伝統建築を模した木造屋根の架台
がある。つまりここでは、複雑な形状の文化財
の屋根を想定したさまざまな瓦の葺き方や納ま
りなどを学ぶことができる。また、日本伝統瓦
技術保存会として工事現場見学や造瓦研修など
も定期的に実施し、技術者の育成に努めている。
「国からお金をもらっている以上、何とか一
人でも多くの職人を育てたいと思って、いろい
ろやっています。しかし年に何度かの研修会だけ
ではやはり足らん。毎日現場で経験積んで、何